

Title	<Book Review>Thawit Suphaphon, Prawatsat Thai-Khom-Khamen, Bangkok : 1965,832p
Author(s)	桂, 満希郎
Citation	東南アジア研究 (1966), 4(1): 179-179
Issue Date	1966-06
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/55194">http://hdl.handle.net/2433/55194</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

理論であるが、本書はこの理論に基づいてタイ語の Syntax を記述するものである。全体を Phrase structure, Generalized grammatical transformation, Optional grammatical transformation, Obligatory grammatical transformation に分けて説明しているけれども、これらはすべて置きかえのルールより成り、最後まで読み通してはじめて、タイ語の Syntax 構造が明らかになると言った性格の本である。頁数も余り多くなく、複雑な Syntax 構造を非常に簡潔に要領よく記述していると言えるが、Transformational analysis の理論について予備知識を持ったうえで読まなければ、とても理解できないのではないかと思う。

もちろん、私は本書が完全なものだとは思わないし、むしろキメが荒いと思うくらいであるが、タイ人の手によってこう言った研究がなされていると言うことは、喜ばしいことであると同時に、我々外国の研究者にとっては、驚異に値することだと思う。とにかく、タイ人はタイ語がわかるのであるから、彼らが本腰を入れてこういう研究を始めたら、とても太刀打ちできなくなるのではないかと思われる。Transformation の理論自体が、未だ完成したものとは言えないけれども、色々な面で大きな成果を上げていることは事実である。最近、外国の研究者に対するタイ語教授、あるいはタイ人に対する英語教授等の必要が大きくなりつつあるが、こういった実用的な面での効果をあげるためにも、本書の様な基礎的な研究が必要であると思はれる。先にも述べた様に、本書が完べきなものだというつもりはないが、こういった研究が地道に続けられ、つねに補正されて行くということは、タイ語研究にとって喜ぶべきことだと思う。(桂満希郎)

Thawit Suphaphon. *Prawatsat Thai-Khom-Khamen*. Bangkok: 1965. 832p.

タイ国の歴史に関する書籍は数多く出版されているが、それらの中で本書は、タイ族、コーム族、クメール族と3つの民族の相互関係に焦点をしばって書かれているという点で特色を出したものである。他の歴史関係の本と同じ様に、歴代の王朝を追って説明して行くわけであるが、上記の3民族の関係ということの中

心としており、その他の余り関係のない事柄は切りすてるなり、ごく簡単にふれるにとどめるなりして、かなり問題点のはっきりした書物となっている。一方、中心問題に関係ある事柄については詳しく述べているので、相当な大冊となっている。

まず全体を、Ayuthaya 王朝以前とそれ以後とに大別する。前者においては、タイ族が中国より南下する以前の状態について略述し、ついで Sukhothai 王朝に至るまでの3民族の交渉について順を追って説明する。後者においては、Ayuthaya 王朝、Dhomburi 王朝、Ratanakosin 王朝、フランスのカンボジア統治という順序で、3民族の相互関係を説明している。タイ族の南下より近代に至るまでの3民族の交渉史概説とでも呼ぶべきものであろう。駆使している資料も相当な量にのぼっている。クメール族、タイ族というのは一応誰でも知っている民族であるが、コームというのはクメール族と同じもの、あるいは極めて近い関係にある同系統の民族といわれており、タイ族がタイ国に入ってくる以前にすでにその地域一帯に居住していたと考えられている。私は歴史について云々する資格はないので、ただ本書でこれらの民族について書かれていることを紹介するに止める。本書によると、コームがタイ族以前から住んでいたクメール系の1民族であるに対して、現在のクメール族(カンボジア人)は、コームと同じものではなくて、タイ族の勢力が広まるにつれて、その地区に住んでいたコーム族との間に出来た民族だとする。私は別にこの考えに賛成も反対もするつもりはないけれども、本書がこういった考えの上に立って、これら3つの民族の関係、交渉について書かれているので、紹介するまでである。もちろん、タイ人によって書かれたものであるから、タイ国あるいはタイ族に最も多くの比重が置かれているが、原則としては、インドシナ全体を捕えて書かれたもので、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナム等を全体として扱っている。本書が学問的にどれだけの価値があるか、あるいはどの程度の水準のものであるかは、私には何とも判定する資格はないが、歴史の本として、少なくとも、読んで楽しいものであることはまちがいない。

(桂満希郎)